

研究発表会・講演会・意見交換会

日 時：平成 25 年 10 月 24 日(木)・25 日(金) 研究発表会(全国大会)

10 月 24 日(木) 18:00~20:00 意見交換会

10 月 26 日(土) 9:00~16:30 見学会

場 所：研究発表会 名古屋大学野依記念学術交流館

意見交換会 南部食堂

見学会

日本原子力研究開発機構瑞浪超深地層研究所及び御嵩町亜炭坑廃坑

参加者：研究発表会：234 名 意見交換会：151 名 見学会：28 名(20 名+役員 8 名)



研究発表会会場全景



千木良会長挨拶



特別講演(福和教授)



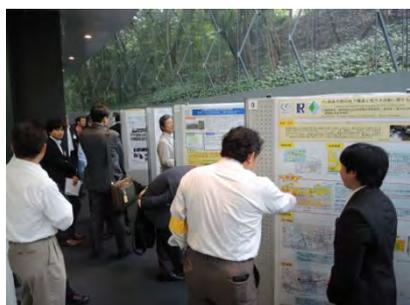
第1会場の発表状況



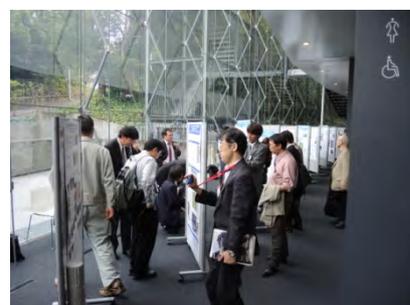
第2会場の発表状況



第1会場聴講状況



ポスターセッション



ポスターセッション



受付状況



意見交換会 小嶋支部長による乾杯



意見交換会



ポスター賞表彰



名古屋大学博物館ガイドツアー



同左



見学会参加者集合写真



瑞浪超深地層研究所での説明
(尾方副支部長)



同左



瑞浪超深地層研究所見学



同左



同左



御嵩町壱炭坑見学



同左



中山道みたけ館見学

平成 25 年度研究発表会報告

事業企画委員会

一般社団法人日本応用地質学会・名古屋大学博物館共催の平成 25 年度研究発表会および見学会が、一般社団法人全国地質調査業協会連合会、中部地質調査業協会、中部土質試験協同組合の協賛を得て、下記の日程で開催された。

会場となった名古屋大学野依記念学術交流館では、口頭発表 67 編、ポスターセッション 48 編、合計 115 編の発表が行われた。また中部支部の企画で、研究発表会前日には千木良会長による一般向け普及講演会が、第 2 日には名古屋大学博物館ガイドツアーが開催され、いずれも盛況であった。このほか、研究発表会開催直前に伊豆大島で大規模な土砂災害が発生したことを受け、緊急セッションとしてポスターを数件掲示し、会員からタイムリーな発表をいただいた。

災害によりお亡くなりになられた方々のご冥福をお祈り申し上げますとともに、被害に遭われた皆様に心よりお見舞い申し上げます。

以下に研究発表会の概要を示す。

日 時：平成 25 年 10 月 24～25 日(研究発表会)
平成 25 年 10 月 26 日(見学会)
会 場：名古屋大学野依記念学術交流館
(名古屋市千種区不老町)
参 加 者：研究発表会 234 名
意見交換会 151 名
見学会 20 名(運営幹事・講師除く)

特別講演：

名古屋大学減災連携研究センター長 福和伸夫教授
「歴史と現代を対比し克災する」

見学会：「岐阜県東濃地域の地下環境」

口頭発表：67 編

- ・斜面・地すべり16 編
- ・特別セッション：放射性廃棄物処分.....15 編
- ・調査・計測15 編
- ・地質・分類13 編
- ・環境・地下水.....8 編

ポスターセッション：48 編

- ・特別セッション：放射性廃棄物処分.....6 編
- ・環境・地下水.....7 編
- ・地質・分類8 編
- ・斜面・地すべり11 編
- ・調査・計測16 編

緊急ポスターセッション：伊豆大島災害.....5 編

特別講演：「歴史と現代を対比し克災する」

名古屋大学減災連携研究センター長 福和伸夫教授

建築耐震工学の専門家として、また近い将来発生する東南海地震の対象地域である名古屋圏の研究者として、構造物の地震被害を中心に「歴史と現代を対比し克災する」とのテーマで講演をいただいた。

講演の前半は、巨大地震時における軟弱地盤上の構造物被害について説明された。特に、巨大地震時における軟弱地盤の振動を十分に考慮せずに、高層建築物が建設されていることの危険性を強く指摘されていた。あわせて、現在の建築基準では、残念ながらそのような構造物が建設できてしまうことを説明された。また、講演のテーマでもある「歴史と現代の対比」として、過去の地震被害から、軟弱地盤上に発展する東京、横浜、大阪における巨大地震時の危険性を説明、地震に対して不利な地盤・地形条件であるにも関わらず、現時点での立地の有利さから重要な施設や高層建築物が低地に建設される現状を、分かりやすく説明された。

次に、「克災」に対する先生の教育・啓蒙活動を紹介された。地震に関わる研究者は、地震被害について、研究者間の専門的な議論だけに終始するのではなく、一般市民に理解・納得してもらう努力が重要であることを熱く語られ、地震被害軽減のための教育として先生が考案したユニークな実験（紙ブルルシリーズ・ストローハウス等）を映像とともに紹介された。また、その一環として、現在建設が進められている「名古屋大学減災館（案）」の説明があった。当施設は、地震の研究・学習拠点として活用するだけでなく、地震発生後の対応拠点としての活用も視野に入れているとのことであった。

講演の最後には、「東京から地方へ」と題し、現在の東京一極集中に対する危険性を指摘し、自然災害が多い日本の進むべき道として、地方の活性化を視野に入れた自律分散型の国土を提言された。またその中で、他の大都市に比べ、大地震への備え・考え方が浸透している名古屋圏の魅力を強くアピールされた。

講演終了後、教育現場への減災教育のアプローチについての質問に対し、現場の先生方への教育を積極的に行っていることが説明され、防災教育を特別な活動として取りあげるのではなく、先生方の普通の教育の中に取り入れてもらうことを視野に入れているとのことであった。

(文責：兼松 亮)

ポスター賞の選考

今年のポスターセッションでは 48 編の発表があり、これらについて学会理事による厳正な審査が行われ、最優秀ポスター賞 1 編、優秀ポスター賞 1 編が選出された。発表者には、意見交換会の席上にて千木良会長から表彰状が手渡された。

【最優秀ポスター賞】

P30. すべり面粘土と断層ガウジを識別する複合面構造 - 秩父帯の地すべりを例として -

○山根 誠, 山田政典, 仙石昭栄, 脇坂安彦, 赤松 薫
本発表は、破碎帯として一括される構造も、ルーペ等を用いた肉眼観察や、更にスキャナという電子の目も使って、丁寧に観察することで、どのような成因でこの破碎帯が形成されたのかを示した発表である。

発表者らは、CAD でない鉛筆の筆圧の強弱、細線太線を巧みに使い分けたコアスケッチを成果とし、微細構造での粒子の配列や傾き方向を詳細に調べることによって、一つの破碎帯に実は正断層系と逆断層系の二つの面が有ることをつきとめている。またこの発表に至るまでには 1)乱れの少ないコアを採取する、2)礫まじりの不均質なコアを綺麗にスライスする、3)スライスコアを丁寧に扱い詳細に観察する、言わば愛情を持って対峙するという大切なプロセスが入っている。

本発表は今後、この破碎帯が地すべりなのか活断層なのかを判定する重要な解析手法として発展することを期待するものである。

【優秀ポスター賞】

P47. 大深度・原位置の物理化学状態の採取に対応した電動駆動タイマー式地下水採水装置の開発

○吉岡正光, 丸井敦尚, 井川怜欧, 町田 功, 越谷 賢, 萩原育夫, 海老 博

本発表は、深度 943m の深層ボーリング孔内でねらった深度の孔内水のみを採取し、採取深度外の孔内水の混入が無く精密に採水する技術、特に採取器のバルブの開閉の確実性の確保で苦心され開発に成功した孔内水採水装置の発表である。地下深部での採水のため、メカニカルな制御を地上から行うことは難しく、機器にタイマーを内蔵し、地下深部で自動的にバルブを開閉できるようにしたことが大きな開発点である。

本ポスターでは、この成果を少ない配色で表現するなどの工夫をしており、この素朴なプレゼンに逆にセンスを感じる。地味であるが故に人の心を打つ強いアピールを感じた。

(文責：緒方 信一)

見学会報告

見学会は、一般参加者 20 名、運営幹事・講師 8 名、総勢 28 名の参加を得て、日本原子力研究開発機構瑞浪超深地層研究所、御嵩町垂炭鉱廃坑および中山道みだけ館・ミュージアムを見学した。

瑞浪超深地層研究所では深度 300m の研究アクセス坑道において、高レベル放射性廃棄物の地層処分を安全に行うために花崗岩を対象とした岩盤の強さ、地下水の流動機構や水質などの調査技術開発の現場を見学した。

また、御嵩町の垂炭鉱廃坑では、当時の素掘りのま

ま残された廃坑の中を見学し、垂炭鉱の品質や採掘状況を直接見る事ができた。

中山道みだけ館・ミュージアムでは、御嵩町の宿場町や垂炭鉱の開発の歴史や採鉱道具の展示があり、当時の苦勞が偲ばれた。

台風の通過により見学会の開催が危ぶまれたが、当日の午後には晴天となり、無事、見学会を終えることができた。

なお、休日返上で見学会にご協力いただいた瑞浪超深地層研究所および御嵩町の職員の方々に感謝の意を表します。



写真 見学会参加者（瑞浪超深地層研究所前にて）

【参加者の感想】

岐阜県東濃地域にある瑞浪超深地層研究所と御嵩町の垂炭廃坑を見学した。ここは私が就職の内定をいただいている原子力燃料関係の会社と深く関わりがあることからとても興味を惹かれ、見学会に参加した。最初に訪れた瑞浪超深地層研究所では、立坑を降りて地下 300m にある地下の研究施設の見学を行った。また垂炭廃坑では、当時のままに坑道が残されているため、地盤沈下や表層陥没の原因になっていることの説明を受けた。今回の見学会では、地下の世界を垣間見ることができた。素晴らしい見学会を企画していただいた幹事の方々に感謝の意を表します。(山口大学大学院 多田賢弘氏)

深度 300m の研究アクセス坑道の壁面を観察する貴重な体験をさせていただいた。花崗岩の割れ目から湧出する水量が多かったことが印象的で、掘削技術や調査手法だけでなく様々な課題が発見された現場であると思った。(筑波大学大学院 佐藤稔氏)

(文責：情野 隆)

